群馬の温泉絵図（伊香保温泉）

この絵図は、江戸時代末期、歌川（安藤）広重の筆によるものです。大きさは縦三七㎝、横五七㎝です。伊香保温泉は、『神道集』によると六世紀代の榛名山二ツ嶽の噴火の名残で、湯街は天正年間に里人が領主武田氏からこの地を賜り湯宿を設けたことによります。泉質は硫酸塩泉で、湯は酸化鉄により茶褐色をしています。明治時代には、東京医学校教授ベルツが著書の中で紹介しています。そして、明治の文豪徳富蘆花の小説「不如帰（ほととぎす）」の舞台となり、全国的に有名になりました。